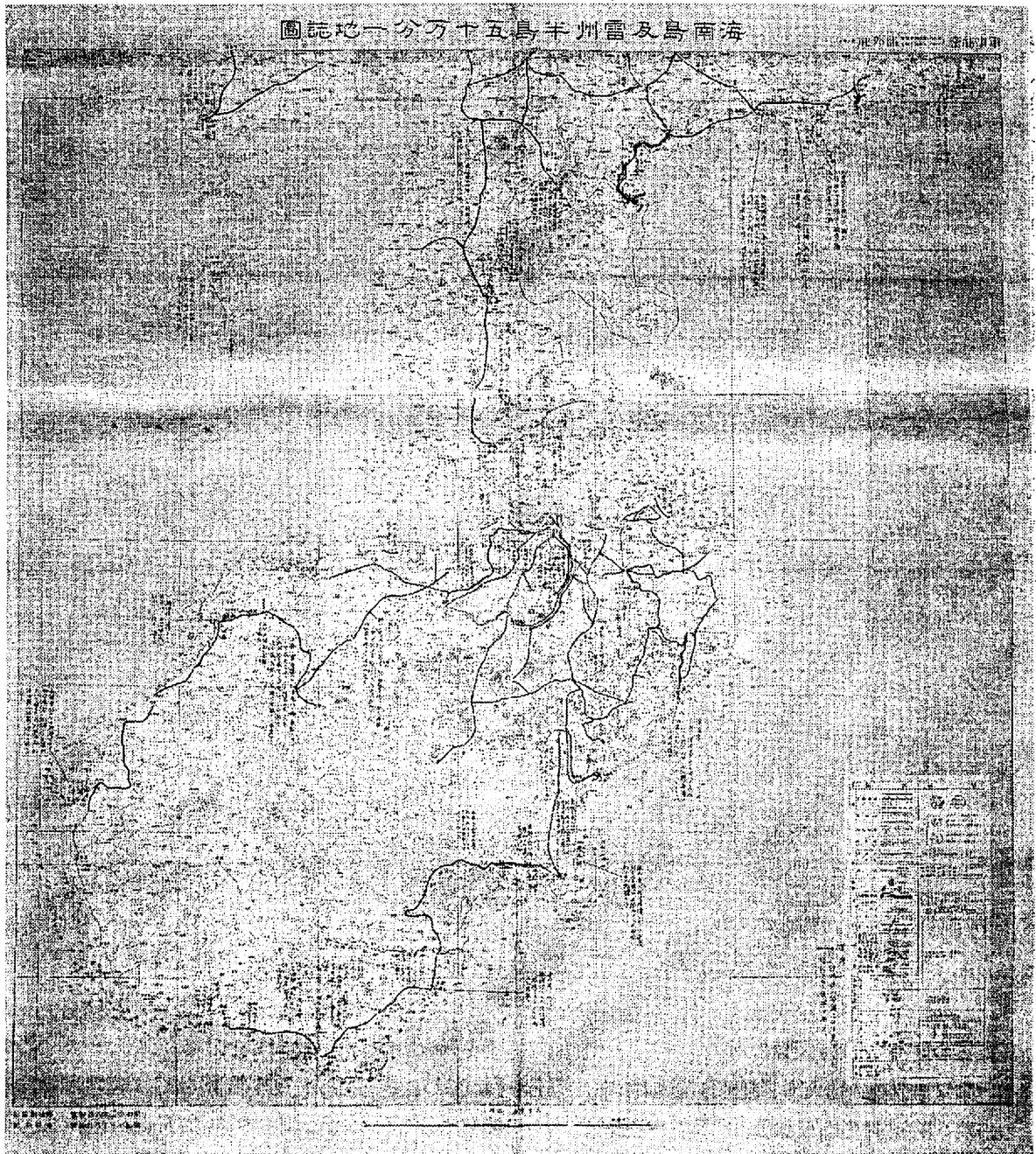


4-2 「旧日本軍作製の兵要地誌図」(大阪大学総合学術博物館設立記念展)で展示した主要図幅とその説明  
小林 茂・今里悟之



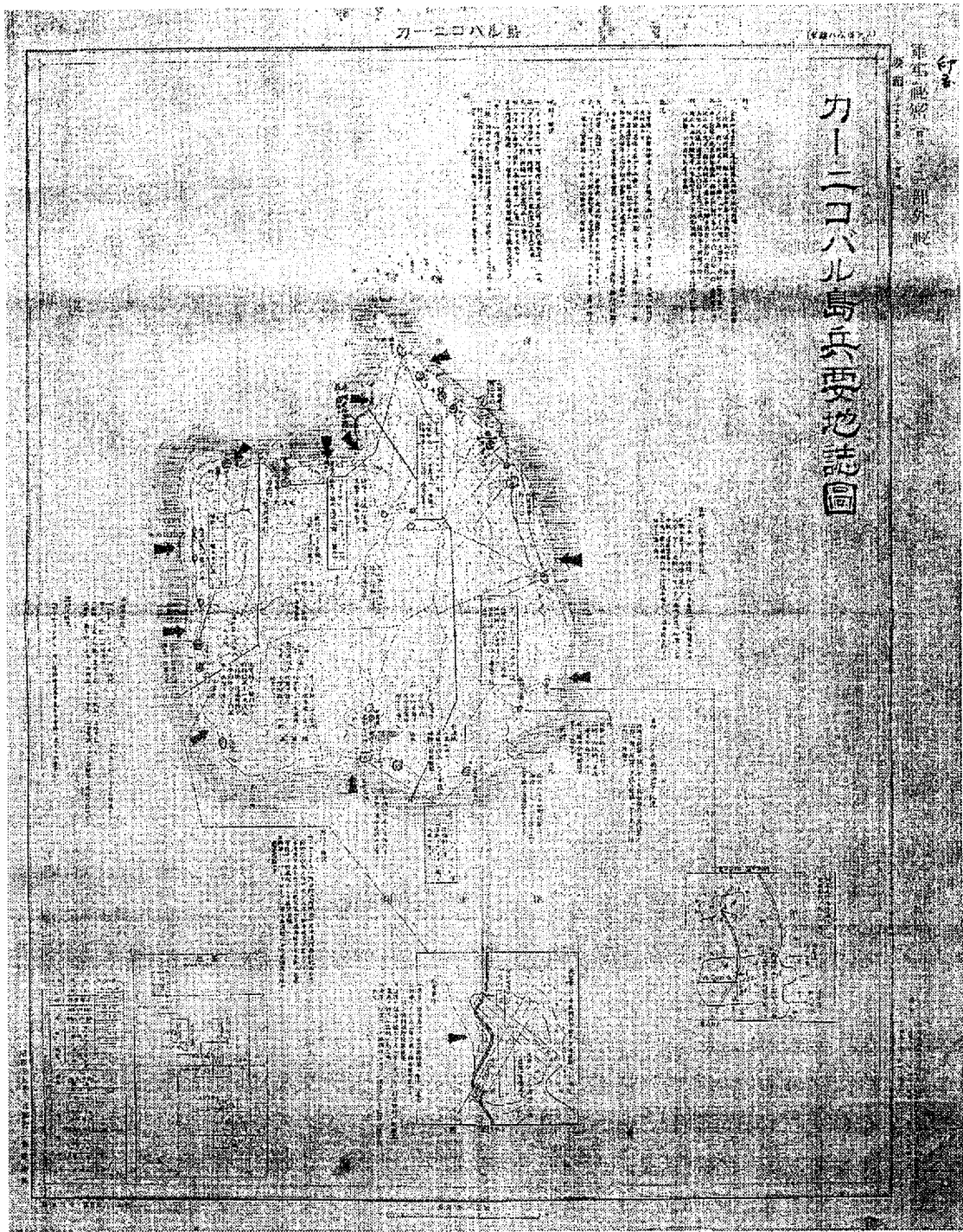
**墨爾根(メルゲン) (50 万分の 1)**

ベースマップを、関東軍測量隊作製の満州五十万分一図(1934 年 11 月製版、1936 年 3 月修正、陸地測量部)とし、1934 年 12 月に関東軍参謀部調製の兵要地誌図を 1935 年同部調製の兵要地誌図および補修要図により修正したものである。作製者は参謀本部と考えられる。「墨爾根」(メルゲン)という図幅名は、他の資料では「嫩江」(メンチャン)となっている。嫩江には清代に墨爾根城が設置され、1908 年に嫩江府がおかれた。現在は黒竜江省に属す。図幅の北東端に黒竜江がみえている。谷間の湿地はツンドラになっており、軍隊や車両の移動可能性に関する記載が多い。なお、アジア歴史資料センターが公開している旧陸軍の「満密大日記」および「満受大日記」には、本図作製に関連すると考えられる資料が収録されている。



**海南島及雷州半島五十万分之一地誌図(50万分の1)**

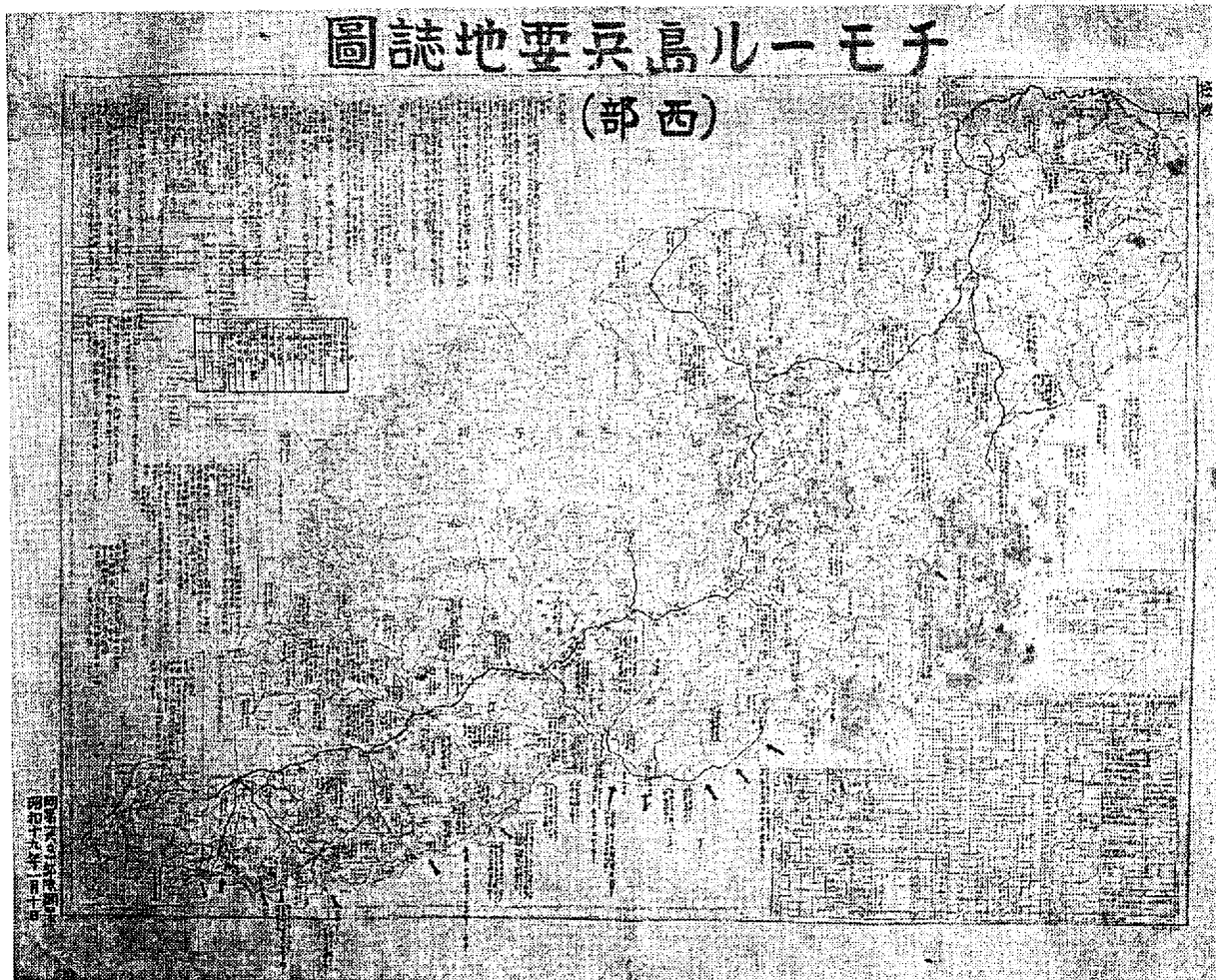
ベースマップを1938年8月製版の地図(陸地測量部)とし、同年同月参謀本部調製としている。海岸部付近の水深も記入するところから、作製に際し海図も参照したことがあきらかである。図式には冬期(結氷期)の交通路の状況を示す記号があり、満州など北方の兵要地誌図用に設定されたものが、そのまま踏襲されたことを示している。なお、1939年2月に日本軍は海南島を占領した(本ニュースレターの表紙も参照)。



カーニコバル島兵要地誌図(5万分の1)

ベースマップを空中写真測量によっているが、地名・方位は45万5千分の1海図によるとしている。1943年製版で、記号は「南方仮図式」による。「昭和十九年一月調製 参謀本部」と記されているが『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録』(1995年刊)の永吉敬典氏の手記により、南方軍総司令部の兵要地誌班により、現地調査をふまえ元図が作製されたことがあきらかである。当時日本軍はアンダマン諸島・ニコバル諸島(現インド領)を重視しており、上陸地点や飛行場の適地について記している。





チモール島兵要地誌図(西部) (25 万分の 1)

ベースマップとしてオランダ製の地図の複製を使用。凡例に英語が併記されている点からすると、アメリカ軍によるその複製を元図にしている可能性もある。左下に「昭和十七年八月複製 岡第一三七一部隊」と注記されているうち、「岡」は南方軍の通称である。一三七一部隊は当時の関係者によれば、印刷にあたった工兵隊の秘匿名ではないかという。また左下の朱書の「岡第一六〇一部隊」は、同様に当時の関係者によれば、南方軍総司令部の秘匿名で、1944年1月にシンガポールで印刷されたものと考えられる。左端中央やや下の「参考資料」から、「海兵団」にくわえ、やはり南方軍に属した「豎集団」(第19軍の通称、終戦時駐アンボン)、「治集団」(第16軍、終戦時駐ジャカルタ)作製の関連資料を利用したことがあきらかである。また右下の橋に関する表から、1943年に現地調査がおこなわれたこともわかる。